

徳島県

J A板野郡

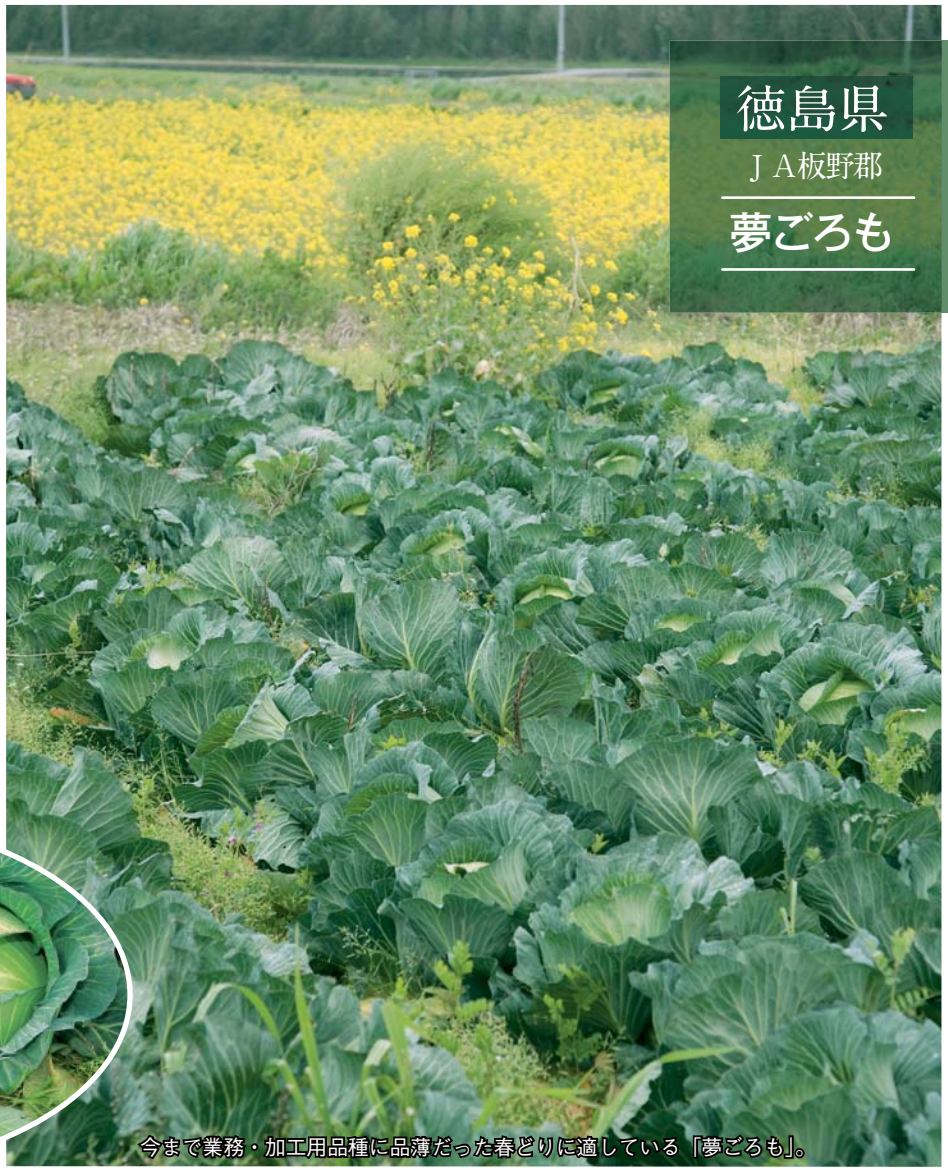
夢ごろも

地域概況

【吉野川がもたらす肥沃な土壌】

J A板野郡は徳島県北東部の吉野川下流域に位置し、北部は泉谷川、坂東谷川などの阿讃山脈に源をもつ河川の扇状地があります。海岸線近くに砂地畑、やや内陸部の低地にはレンコン田が広がっています。年平均気温は15.0~16.5℃と比較的温暖で、年間降水量は1,500mm程度の少雨地帯です。

吉野川沿いの耕土が深く肥沃な沖積平野では、瀬戸内の温暖な気候を生かし、ニンジンやレタスなどの園芸作物を主体とする、県下有数の農業生産地帯として発展してきました。



今まで業務・加工用品種に品薄だった春どりに適している「夢ごろも」。



加工用向け春どり品種に 加わった「夢ごろも」 ~契約栽培での安定生産に適した品種を求めて~

徳島県 J A板野郡 営農指導部営農指導課 副考査役 横田 浩暉

契約栽培への転換

最近では都市化が進み、農地の減少や担い手の高齢化、新規就農者は少なく、厳しい現状にあります。このような状況を補うため、加工用キャベツの栽培を平成18年に約80aで試験的に導入し、生産者4名から取り組みをスタートしました。

平成19年は、約6haで生産者は20名でした。当時の品種は「湖月」「彩ひかり」「彩音」を導入し、収穫時期を1月・2月・3月と分散して栽培していました。

平成20年には、面積が約11ha、生産者は32名となり、産地として大きくなってきたため加工用キャベツ部会を結成しました。コスト低減のため、部会で決めた肥料・農薬を協同購入しています。部会では出荷時期を11月から3月まで均等に作付けし、出荷に切れ目のないよう計画しました。品種については11月収穫に「おきな」、12月・1月収穫に「湖月」、2月・3月収穫に「夢舞台」として、このころ試験的に3月下旬から4月中旬収穫に「夢ごろも」の栽培を始めました。

平成21年には約23ha、生産者は44名、出荷時期は11月から4月までの



↑慣れた手つきで収穫。加工用向けには量産が必要となり、一斉収穫が重要。



↑市場出荷から契約栽培に移行し、産地発展を目指す、生産部会長の藤井さん（左）と筆者（右）。

作付けで、品種は「おきな」「湖月SP」「夢舞台」「夢ごろも」と作付け体系が固まりました。

●4大品種の特長

「おきな」は萎黄病抵抗性で、酷暑・耐寒性に強く草勢旺盛で作りやすい品種です。玉は鮮緑、尻づまりのよい扁円球の早生種です。

「湖月SP」は草勢旺盛な大玉で、裂球が遅く収穫期の幅が広い品種です。

「夢舞台」は萎黄病抵抗性で耐寒性が強く、玉は濃緑色のやや甲高な扁円球で市場でも評価が高く、生産

安定と収益が見込めます。

これらに加えて「夢ごろも」は、濃緑色で耐寒性・低温肥大性・晩抽性にすぐれています。また、甲高豊円球で肥大がよく、形状安定性にすぐれ、結球後の裂球も遅く収穫期幅は広いので、3月下旬から4月中旬収穫の主力品種として栽培すること部会で決定しました。

加工用キャベツの栽培概要

加工用は青果と違い、キャベツを大きくしないと収量が減ってしまいます。そのため株間は40cmと広めにとり、10a当たり約3800本を目安にしています。1個当たり約3〜5kgまで大きくし、10tを目標としています。

出荷方法は加工用向けに省力化を図り、ダンボールではなく金属製コンテナを利用してします。軽トラックでそのまま畑に入って1・2kg以上のキャベツを一斉収穫しています。箱詰作業時間の短縮により、面積の拡大が可能になりました。

最近では、根こぶ病の発生が出てきているので、対応策の検討と資材や対応品種を試験栽培していきたいと思っています。

“安全”と“安心”されるキャベ



↑裂球が遅く、玉肥大とそろい性にすぐれる「夢ごろも」。



↑コンテナでの出荷は、箱詰作業の手間がかからず、ダンボール箱の出荷資材費も不要に。

ツ作りのため、キャベツ防除マニュアルを活用し、現場での徹底した適性防除と、生産履歴の記載を行い、出荷前には必ず提出確認しています。また、残留農薬分析を実施し安全を確認しています。

鍵となる品種選定

品質収量を重視した生産の高位標準化を進めるためには、品種の選定

とその特性を生かす定植時期が、収益面でかなりの影響を与えるようになりしました。気温や乾燥によっても出荷時期のずれがあるので、中心的な品種となっている「おきな」「湖月SP」「夢舞台」「夢ごろも」の間に入る品種を検討すると、面積を拡大させるために5、6月収穫の試験的栽培をしています。

栽培面積を広げ力強い産地に!

今年の計画では、農家の方から栽培希望面積として約30ha分の予約が入っています。今後も優良品種を導入していき、土づくりによる土壌の物理性の改善や、農家の労働力を減少できるように、作業性や機械化、省力化が必要となってきます。これから産地の実態を見つめ、競合産地に打ち勝つ力強い生産組織の進展など、常に新たな飛躍を目指したいと考えています。



→「今後も加工用向けの栽培面積を拡大していきたい」という筆者。